

提携米通信

2021年7月号・黒瀬農舎

マガモ君も手作り除草機も大活躍中です。



手作り乗用除草機快調です。2021.6.7撮影 当地は沈車防止が最大の命題。軽量化を極めた特製自家製機。軽量化した部品の田車などは2町歩程度で消耗。早朝から日没まで除草機掛け、夜は遅くまで鉄の切断、穴あけ、溶接などの消耗部品交換・改良の工作作業を続ける季節です。

今年は全国的に早く夏が来たようですが、当地は5月末から6月上旬は低温続きでした。

低温で稲の活着が遅れ、マガモの放鳥は例年よりも1週間ほど延ばしました。

稲の活着は遅れても、雑草は元気に生えてくるため、マガモ君到着までに、手作りの特製除草機で第1回目の機械除草を行いました。

当地の田圃は、元々は八郎湖の湖底そのものです。天然ミネラルも多く肥沃で稲には好適ですが、

難点は、田圃が湿潤で軟らかく、トラクター、田植え機、コンバインなどの農機がぬかるみで沈車することが多いことです。

そのため、除草機も市販品は、ほとんど使用不能。悪条件下でも使えるように、改造や試作を繰り返し、やっと一昨年、ほぼ使用に耐える・・・という意味は、悪条件であっても沈車し難い乗用除草機の製作に、鉄を切ったり溶接したり、周りの人々に唾われながら、何年も何年も愉しくて難しい課題に挑戦。更なる精度の向上が待たれるもののほぼ成功。

除草機は3～4回掛けますが、1回目は何とか沈車せずに行えても、1回目の車輪で深くなり悪化した田圃は、2回目は動けなくなる。改良し2回目も成功。でも、3回目は沈車。

形状の異なる車輪をダブルに取り付けるなど改良を重ね、やっと4回まで沈車しない乗用除草機に漕ぎ着け、スタッフの青年も「楽だ!」と喜んでいます。

動物も植物も同じです。気温が高いとカモの成長も活動も活発になります。例年よりも放鳥は遅らせたが、マガモ君を迎えてからは気温も高く、マガモ君大活躍しています。

ほぼ半分の10畝が完全無農薬の有機認証栽培、残りも、除草剤1回以外は農薬を一切使わない我が農舎は、田植え後2ヶ月は早朝から夜遅くまで一年で一番忙しい日々です。

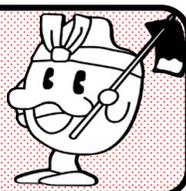
提携米 黒瀬農舎

〒010-0445

秋田県南秋田郡大湯村西1丁目4の7

黒瀬 正・友基

TEL:0185-45-3088 FAX:45-2887



E-mail: akita@kurose.com Web:

提携米 黒瀬農舎

検索

★定期購入の場合も、変更や前倒しの出荷・休止はいつでも対応いたします。変更や休止は次のお米のお届けの5日ほど前までにご連絡下さい。

★お米のご贈答利用も宜しくお願ひします。

★電話は土日祝日も含めて朝8時～夜8時頃まで対応致します(自宅兼事務所)。但し、電話受付の専任スタッフはいないため田圃や倉庫作業、外出の時は留守番電話対応となります。ご了承願ひします。

また、メールもぜひご利用下さい。なおメールは原則すべて返信していますので、返信メールが届かない際は自動的に迷惑メールとなっている可能性があります。迷惑メールやメールの設定をご確認下さい。

世は「脱炭素社会」農水省も大転換/マガモ君の時代到来か？

近年は良く効く農薬が開発普及して、一般のお米作りはほとんど手間がかからなくなりました。どの農村でも田植えが終わると、田圃に人影がありません。

私たちの地域でも田植え後は、朝食前に田圃の水を見回りに来る人をたまに見かけるだけで、日中に田圃作業をする姿はまったくといっていいほどありません。

マガモ君頑張ってます。 2021.6.22撮影

水田放鳥用のカモは、アヒルを交配したアイガモがほとんどですが、我が農舎は、小さいが活動活発な野生種のマガモです。



ほどありません。

作業している農家は、我が農舎のように無農薬や有機栽培をしている限られた農家だけという時代になりました。

田植え後の時期が一番忙しい我が農舎は、まさに時代遅れの典型かも知れません。

雑草対策での確実な方法は、まったくありません。種々の除草機械や耕種的な雑草処理方法が毎年幾つも開発や発表されますが、これらはすべて「補助的手段」と捉えるのが適当な機械や方法に過ぎません。

太古から「作物栽培は草との闘い」と言われているように「雑草も育たないところ

で、作物は穫れない」のは当然ですから、農薬を使わないで、農薬並に効果的な除草対策は今後も現れることはないと言えます。

これらの色々の抑草対策や除草方法を補助的手段として組み合わせて、観察と的確な対処、それに惜しみなく労力を使うなど勤勉に働くしか方法がないのが現実です。

少し怠ると、秋には、半作を超える減収や収穫皆無が待ち受けているのが無農薬有機栽培です。

「緑の食料システム戦略」

農水省は、菅首相の脱炭素社会構築宣言を受けて2050年度までに農薬の50%削減や有機農業の割合を25%に拡大する方針の「緑の食料システム戦略」を打ち出しました。

米の有機の場合、現在の2%程度を、生産者政策によって25%に引き上げるのは至難です。

今まで、ほとんど関心を示さないどころか、農薬や化学肥料を推奨してきた農水省が政策大転換したことには賛同し、歓迎するところではありますが、実際に有機農業を長年続けてきた者としては、そう簡単には拡大できないのではないかと心配しています。

我が農舎の、時には半作以下になる危険や、農薬や化学肥料栽培に比べれば、何倍どころか10倍を超えることもある人件費や有機資材を使うなど、リスクとコストの高い有機無農薬栽培が、今のところ何とか続けられているのは、次のような背景や理由による、特異な例です。

一つは、自己の健康だけでなく環境問題などに関心が高く、社会性のある生き様をお持ちの、まさにスイス国民のようなエシカルな消費者の方々が、高い生産コストの負担をはじめ、物心両面から自然との共生を目指す生産現場を応援下さるといふ支えがあるからです。

二つ目は、当時としては超大規模であった、大潟村の機械化高効率大規模稲作農業のモデル経営を体験した後に、海外の大規模農場を訪ねて、大規模効率化農業の自然を征服する姿勢や将来性などに疑問を感じたこと。また、同じ時期に、農薬や環境関係への問題意識や関心に目覚めたこと。

三つ目は、元々の性格がひねくれ者・天の邪鬼で、脱サラ後始めた大規模効率モデル農業が予想より順調に軌道に乗ったため、それを継続するのは面白くない。もっと難しいことや、苦勞することに挑戦することで、人生を愉しみたい。などと思った。・・・etcです。

このように、何はともあれ消費者の賛同と支援、生産者の価値観の転換がなければ実現不能です。我が農舎はご支援下さる皆様のお陰で続いています。改めてお礼申し上げる次第です。